

自己評価報告書(最終報告)

コース等名

言語系コース(英語)

記載責任者

藪下 克彦

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員就職率向上方策について

本学は第二期中期目標・中期計画において、「学士課程において教員就職率を70%以上にする」と明記している。教師を目指す学生が一人でも多く自己の進路希望を実現できるよう、この数値目標を達成するのはもちろんのこと、より一層教員就職率を上げるため、貴専攻・コースではどのような取り組みを行うか。具体的な方策を示してほしい。

1. 目標・計画

- ゼミ指導教員を中心に、コース全体の協力体制のもと、教員採用試験、具体的には、英語専門試験、英語による面接などのための指導を行う。
- 就職支援室主催の就職支援行事に参加を促す。
- 教育委員会からの大学推薦依頼や私立学校教員募集などの情報を逐次周知する。

2. 点検・評価

- 教員採用試験対策指導として、英作文の添削、大学入試レベルの英語のレメディアル教育、教員採用試験の過去問、特に英文法の検討・解説などをゼミを中心に行った。
- 就職支援室主催の支援行事へは、授業中、ゼミ中、メールなどで、参加を促した。
- 教員募集の情報は、就職委員会委員から随時、メールで各教員に伝えられ、そのあと、ゼミ生、担任をしている学生に伝えられた。

上記の対策、指導体制の結果かどうか分からないが、おかげさまで、2013年度学部卒業生は、進学者を除いて全員、正規または非常勤で教員に採用された。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- 全学対象の必修科目である「英語コミュニケーション」は、予算と人事が許す限りネイティブ・スピーカーが担当することとし、本学学生の英語運用能力を高めるべく、授業改善を図る。
- 同「英語リーディング」はTOEIC対策とし、教員採用試験や他の就職試験に役立てる。
- 海外留学のための情報提供ならびに学習支援を行う。
- 学部学生用の学習室(俗称、E-ポケット)を充実させ、自主学習の環境を整える。
- 今年度新装したCALLきょうしつの有効利用を図る。
- TOEIC IPテストを実施するとともに海外留学を希望する学生にTOEFLの受験を促す。
- 英語資格試験の情報を学生に周知する。
- 留学生のための学習・生活支援を行う。

2. 点検・評価

- 「英語コミュニケーション」は本年度もすべてネイティブによる授業を実施し、本学学生の英語運用能力の向上に役立った。
- 「英語リーディング」では本年度もTOEIC対策の授業を実施し、教員採用試験等、就職活動に役立つ指導をした。
- 学生に留学情報を常に提供し、留学を促した。本年度はオーストラリアへ日本語指導助手として1名を派遣した。
- CALL教室を、公開講座、免許更新講習、オープンキャンパスの模擬授業、TOEICの学習会等に使用し、有効利用することができた。
- 英語コースの学生全員にTOEIC IPテストを実施した。その結果を確認し、過去の成績と比較検討し、今後の指導に利用した。また、短期留学制度応募者で、アメリカに留学希望の学生には、TOEFLを受験させた。
- 例年通り、コースの掲示板等を利用してTOEIC、英検、TOEFLなどの情報を提供した。
- 本年は1名の学部交換留学生、1名の正規大学院留学生、2名の教員研修留学生が在籍し、指導教員を中心に学習・生活支援を行った。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

- 教員各自が自己の研究を遂行できるように、教員間で協力体制をとる。
- 英語教育上必要と考えられる研究テーマを設定し、教員相互に協力して共同研究を進める。
- 科学研究費補助金の申請を積極的に行う。

2. 点検・評価

- コース教員の海外出張(6名、通算11回)に際して、出張中の職務に関して教員間で協力体制をとった。
- 「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」における教科内容学研究に関わり、「小学校英語教育論」の教科書の執筆に、コース教員全員が携わった。
- 本年度は継続分を含めて本コース教員3名が交付を受けた。(申請は7本)

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- 教員各自が担当する各種委員会等の職務を真摯に遂行し、大学運営に積極的に関与する。
- 本コースの性格に鑑み、国際交流を支援し、特にコースに関係する分野において積極的に参加し協力する。

2. 点検・評価

- 教員各自が各種委員会などの職務を真摯に遂行し、大学運営に積極的に尽力した。
- フィンランドからの客員研究員1名が10月から滞在(平成26年6月まで滞在予定)。また、鳴門教育大学英語教育学会の年次大会において、フォーラム「J」(インドネシア、ネパール、およびマダガスカルにおける英語教育比較)を実施した。発表者は留学生の Kurnia Ati'ullah (Indonesia), Dor Kumari K.C (Nepal), Rojoniaina Rasolonaivo (Madagascar), 司会者は本学准教授ジェラード・マーシェソであった。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- 附属学校との連携については、授業での取り組みを中心に、附属学校への協力を図る。
- 公開講座、教員免許更新講習及び教育支援講師派遣を積極的に実施し、地域との連携を強化する。
- 海外の研究教育機関との共同研究・事業を推進する。

2. 点検・評価

- 附属小学校および中学校と連携して大学院の授業「教育実践フィールド研究」を展開した。また、推進授業や研究発表会および学生の実習においてコース教員が指導・助言にあたった。また、附属中学校の「総合的な学習の時間」において、畑江准教授およびマーシェソ准教授が毎週のように授業協力をした。
- 公開講座2講座、教員免許更新講習4講習、「なるっこわくわく講座」、小学校英語体験ワークショップを実施した。また、教育支援講師等として10回以上の派遣の実績があり、その他、教員研修講座等を通して地域との連携を図った。
- フィンランドからの客員研究員1名から10月から訪問。(平成26年6月まで滞在予定)
- 国際交流として、オーストラリアへ日本語指導助手の派遣を継続した。また、ウェスタン・カロライナ大学の学生4名、教員1名が来学した折には、英語コース学生との交流会をもった。
- 伊東教授が、フィンランドのタンペレ大学、眞野准教授がアメリカのウェスタン・カロライナ大学に国際交流の可能性を探るため、国際交流委員として訪問した。
- 畑江准教授が、アメリカ・コロンビア大学ティーチャーズカレッジの研究員と英語教育に関する共同研究を継続した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

従来「教育学部はミニ文学部、ミニ理学部ではない」というお題目で語られていた「教科専門科目の内容は、どのようなものであるべきか」という問題意識が、最近になって具体的な形を取り始めた。本学が実施した文部科学省特別経費事業「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」もその具体的な動きの一つと捉えることができる。その事業との一環として、小学校の授業内容に関する専門科目の教科書を作ったのであるが、言語系(英語)コースも「小学校英語教育論」の教科書を作成した。この教科書作成には、コースの全員の教員が執筆に参加した。作成作業を通して、教科教育の教員と教科専門の教員が教科内容(学)のあり方、特徴、課題等に関しての相互理解を進めることができた。そして、全国の大学に先駆けて、(小学校)英語教育にかんする教科内容の試案を示すことができたことは、本学が教科内容学の先駆けになるべく意義のあることであった。